

菅原道真研究 『菅家後集』 全注釈 (二十六)

「492 元年立春 十二月十九日」七・八句の解釈をめぐつて

焼山廣志

一 二

前回に引き続いて、本稿では以下の『菅家後集』の作品の全注釈を試みたい。今回は調査・考察を済ませた『菅家後集』

「492 元年立春 十二月十九日」の一首を取り挙げてみる。とりわけ七・八句の「偏に延喜 元暦を開くを憑み、東北に頭を廻らして斗杓を拝せしを」の二句の解釈について新たな読みの提起を試みる。

注釈を進める上での「凡例」は前稿のそれに倣う。

492 元年立春 十二月十九日

本文

平仄

天啓長寒万物凋	○●○○○○○●○
晩冬催立早春朝	●○○○○●●○○
淺深何水氷猶結	○○○○●○○○○●
高卑無山雪不消	○○○○○○○○○○
根拔樹應花思斷	○○●○○○○○○●
骨傷魚豈浪情揺	●○○○○●○○○○
偏憑延喜開元暦	○○○○●○○○○●
東北廻頭拝斗杓	○○○○○○○○○○

*脚韻は下平声「蕭韻」 韻字は「凋・朝・消・揺・杓」である。

【校異】

○題字下注「七言」…〔内閣〕〔大島〕〔松平〕〔尊四〕〔太二〕

〔刊本〕全本

▼頭注「扶二」…〔内閣〕〔松平〕〔尊四〕

▼頭注「無七言二字」…〔大島〕

○猶…獨

〔彰考〕

○斷…折

〔内閣〕〔松平〕「見せ消」「斷」を消して右に

「折」とある

〔尊四〕

〔内閣〕

○元…馮

〔内閣〕〔大島〕〔松平〕〔尊四〕〔太二〕

〔太二〕〔刊本〕全本

〔新「元」の傍注〕〔静嘉〕〔大島〕

〔彰考〕〔尊一〕〔尊三〕

【訓読】

・天は 長寒して 万物凋むを 愍れび

・晩冬 早春の朝を 催立す

・淺深 何れの水か 氷猶 結べる

・高阜 山として 雪消えざること無し
・根拔けたる樹 應に花の思ひ 斷ゆべし
・骨傷むる魚 豈 浪の情 揺がむや
・偏に 延喜 元曆を 開くを憑み
・東北に 頭を廻らして 斗杓を拜せしを

【通釈】

・天は長く寒さが続くと 万物が凋みなえることを憐れんでか
・晩冬十二月十九日に はやばやと立春を迎えたことだ

・水かさの浅い川・深い川 いずれもが（立春を迎えて）いつまでも氷で結び閉ざしているところがあるか。（あるはずがない）

・高い山・低い山 いずれもが（立春を迎えて）いつまでも雪を残しているところがあるか。（あるはずがない）

・（ところが、いくら立春を迎えたと言っても）根がなければ 樹は 花咲く願ひも断たれてしまふ

・（いくら春を迎えたところで）骨を痛めた魚は 浪間を泳ぐことは出来ないので、氷がとけて春を迎えた浪の喜びに照応することは出来ない

・「延喜」と改名されて 新しい時代の到来したことに 私は 全てを託し、

・東北に頭を向けて はるか京都の空を想い、同じ夜空に宿す この北斗七星に心をこめて祈ったことが、いったい何になら

う。(現実には、私の望みがすべて断たれているというのに)

【語釈】

○題元年立春…延喜元年(九〇一)十二月十九日の事を指す。

年内に立春を迎えたのである。「年内立春」については、柳澤良一氏の詳細な説明がある。³⁾

○₁愍…あわれむ。憫・閑 うれえいたむ。

○₁凋…しばむ。なえる。草木がしおれる。木の葉が黄ばむ。

おとろえて色が変わる。

『論語』「子罕」に、「歳寒、然後知松柏之後凋也」の例が見える。

杜甫の「秋興八首」に「玉露凋傷楓樹林」の句が見える。

『白氏文集』「087歳晚旅望」にも「萬物秋霜能壞色／四

時冬日最凋年(萬物秋霜能く、色を壞り／四時冬日最も年を凋ましむ)」の句が見える。

新釈漢文大系本『白氏文集(三)』の余説には、日本漢

詩の三例を「余説」に挙げている。

余説 大江維時『千載佳句』上、冬興に、「萬物秋霜

能壞色 四時冬日最凋年」と。

同じく「煙波半落新沙地 鳥雀群飛欲雪天」と。

藤原公任『和漢朗詠集』卷上、霜に、「萬物は秋の霜よく色を壞る、四時には冬の日最も年を凋ましむ」と。

(新釈漢文大系本『白氏文集(三)』三〇九頁)

○₂晚冬…冬の末。陰曆十二月の異称。

○₂催立…(天が)立春になることを催す。

○₂早春…春のはじめ。はつはる。孟春。

唐太宗「早春詩」に「寒隨窮律／春逐鳥聲開」の句が見える。

『漢語大詞典』には「①初春」と説明し

〔唐李涉《過招隱寺》詩〕の「每憶中林訪惠持／今來正遇早春時」の句を引く。

『普家文章』「269寄白菊 四十韻」に「早春新賦葉／初夏細牙根」の句が見える。

『紀長谷雄集』にも詩題として「70早春内宴待清涼殿。周賦草樹暗迎春 應製」が見える。

○₃淺深…川の浅い所・深い所。

『白氏文集』「287斲止水」に「淺深三四尺／洞澈無表

裏」の句が見える。

○³何水氷猶結…「川の水は（立春を迎えて）いつまでも水で結び閉ざしている所があるか。（あるはずがない）」の意。

『礼記』卷五「月令・第六」にある「孟春之月。東風解凍、蟄蟲始振。魚上冰、獺祭魚、鴻雁來（孟春の月、東風凍を解き、蟄蟲始めて振き、魚は氷に上り、獺は魚を祭り、鴻雁來たる）」の一文による。（傍線筆者）

『藝文類聚』卷第三「歳時上・春」に引かれている。

『菅家文章』卷四「278立春 在十二月廿六日」の三句目に「証告浪従氷下動（証告す 浪 氷 下より動くことを）」の類似した表現が見える。（後の「三章」で再掲し、詳述。）

○⁴高卑…山の高いことと山の低いこと。「高い山も、低い山も」の意。

『白氏文集』「317菩提寺上方晚眺」に「樓閣高低樹淺深／山光水色暝沈沈」の類似した句が見える。又同じく「003悲哉行」に「山苗與澗松／地勢隨高卑」の

句が見える。

この三・四句は、『新撰朗詠集』「卷上・春」に採録されている。

○⁵拔樹…樹を抜く。樹を抜かれる。

『漢語大詞典』には「拔樹削跡」の項に次のような説明をし、用例を引く。

「指春秋魯孔子在宋国和衛國遭到迫害驅逐之事。」

『晏子春秋』・「外篇下四」「嬰聞之、君子獨立不慚千影、獨寢不慚千魂。孔子拔樹削跡、不自以為辱…窮陳蔡、不自以為約…非人不得其故、是猶澤人之非斤、山人之非網罟也。」

『風俗通』「窮通」にも同趣旨の「夫子逐於魯、削迹於衛、拔樹於宋」の例が見える。（傍線筆者）

○⁵花思斷…（春が来て）花を咲かそうという気持ちだが断ち切られてしまう」の意。

「花思」は先に引いた『菅家文章』「278立春 在十二月廿六日」の四句目に「暗思花在雪中開（暗思す 花 雪中に在りて開かんことを）」と、より具現化した表現が見える。（傍線筆者）

○6 浪情搖…「(魚は)水が解けて春を迎えた浪の喜びに照応する。」の意。

前述した『礼記』卷五「月令・第六」にある「孟春之月、東風解凍、…魚上冰」の一文を踏まえた内容。

○7 偏…ひとえに。『漢辞海』で「④思いのほか。よりによって。

あいにく。平素とは違う感じや意外な感じを表す」と説明する意に近い。『漢語大詞典』ではより詳しく次のように説明する。

「副詞。表示事実与希望相反。亦表现故意违反客观要求」

ここでは、「現実と理想が大きくくい違ふときに使う語」と考えられる用語。

一例として『管絃文章』「38 停習彈琴」の一句目にある「偏信琴書學者資(偏へに信ず 琴書は 學者の資なるを)」がそれである。琴と書が學者たるものの資質(素養)として避けては通れないものと固く信じて、その習得に努めて来たが、(現実はそうではなかった) (傍線筆者)の句意と思われる。この「429 元年立春」の七句目の「偏憑」の「偏」も『漢語大詞典』に言う副詞の用法で、「ひとえに、請い願ひ、あてにして来たが

(現実には、全くそうとはならなかった)」の意でとる。
(↓「四章」で詳述する)

○7 憑…たのむ。よる。請い願う。ここでは直接的には以下の「延喜開元元曆」を受ける語だが、八句目「東北廻頭挿斗杓」の行為全般をも受ける語とみる。

○7 元曆…「こよみ」のこと。

岩波古典文学大系本の底本である尊経閣本では、**校異**でも指摘しているように「元曆」となっているが、他の写本及び刊本全本では「新曆」となっている。

○8 東北…柳澤良一氏が詳細に考察されているように、ここでは「道真が立春の日に東北を仰ぐのは、(北)斗柄が東を指していることに拠るであろう。その「東」(東北)には都はあり、そこにいる醍醐天皇に勅赦を期待する気持ちも生まれたのだろう」³⁾のニュアンスを含有する用語。

○8 廻頭…頭をめぐらす。回頭。

『漢語大詞典』には「把頭轉向后方」と説明し、「元稹『望雲騅馬歌』の「分頭太高／壁廻頭頂難轉」の例を

引く。

『白氏文集』0863初貶官、過望秦嶺に「望秦嶺上回頭立／無限秋風吹白鬚」の句が、又、「123馮閣老處、見興嚴郎中、酬和詩、因戲贈絕句」に「乍來天上宜清淨／不用迴頭望故山」の句が見える。

『菅家文章』は次のような用例がある。

「4賦得赤虹篇、一首」舉眼悠悠宜雨後、迴頭眇々在天東

「127典儀、禮畢、簡藤進士」迴頭眺望紫微宮、百辟星

前再拜風

「215早春閑望」迴頭無外物、漁叟立沙村

「216正月二十日有感」迴頭左右皆潮戸、入耳高低只棹

歌

○8斗杓：斗柄とく。北斗七星の第五から第七に至る三星。



「春秋緯運斗樞」に「第一天樞、第二璇、第三、第四、第五衝、第六開陽、第七搖光、第一至第四爲魁、第五至第七爲杓、合而爲斗。」とある。

川口久雄氏は補注で

「北斗七星のうち、第一星から第四星まで、北斗のますがたの部分」斗魁」と名づけ、杓子形の部分の第五から第七に至る

三星を「斗杓」または「斗柄」という。この斗柄のさす方向によつて四時十二辰をさだめるといふ。」と説明する。

(岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』七三六頁)

『漢語大詞典』では「①即斗柄」と説明し、『淮南子』「天文訓」の「斗杓爲小歲高誘注“斗第五至第七爲杓”の例を引く。

又「②比喻爲人所敬仰者或衆人的引導者」の説明も付す。前掲の柳澤良一氏に詳細な説明と考察がある。³⁾

三

二章で、この句の語釈を通して、全句の解釈を試みたが、この章では、更には七・八句目「偏憑延喜開元曆／東北迴頭拜斗杓(偏に 延喜元曆を開くを憑み／東北に 頭を廻らして斗杓を拜せしを)」の解釈をめぐつて試論を提起したい。次の二点を主論点として考察を深める。

①「菅家文章」278立春 在十二月廿六日」との比較を通して見えて来るもの

②「菅家後集」492元年立春 十二月十九日(本稿対象作品)前後の漢詩群を通して見えて来るもの

この二句については、岩波古典文学大系本で川口久雄氏が頭注で記されている

「延喜と改元されて、世の中の気分が一新した―このこと

私は運命をかけて楽しみにしている。私は東北のかたに、

京都の空をはるかにふりかけてみて、北斗の柄にあたる三星を心をこめて拝する。立春には杓即ち柄は東を指す。これは人心一新とともに、あるいは勅赦があるかとはかなくも期待したのだろう」

を始めとして管見の先学の論文は、ここで隋源遠氏の言を借りるならば

「〔元年立春〕詩の尾聯は、延喜開元の世界から除外されたにも関わらず、その新暦を頼りに、忠義を貫こうとする道真の姿勢が描かれている」

もしくは「延喜開元の世界から除外された絶望と最後まで天子に忠節を尽くすという信念は、太宰府時代の〔元年立春〕詩にある天下の春と、我が身の冬とを通じて描き出された」

（注4 四〇頁）
と言及されるような読みがなされて来た作品と看做して良いと思う。

筆者は本稿でここに一つの新たな訓みを提起するのが、主旨である。

まず、「①『菅家文章』（278立春 在十二月廿六日）との比較を通して見えてくるもの」の考察に移りたい。原詩と訓を以下に引く。

278立春 在十二月廿六日

偏因曆注覺春來

偏に 曆注に因りて 春の來たるを覺る

物色人心尚冷灰

物色と人心 尚冷灰たり

誣告浪従水下動

誣告す 浪は 水下より動くことを

暗思花在雪中開

暗思す 花は 雪中に在りて開くことを

浮雲自後寒応暖

浮雲 自後 寒さ応に暖かなるべし

壯日如今去不廻

壯日 如今 去りて廻らず

消息窮通皆有運

消息窮通 皆 運有り

莫言墮戸不驚雷

言ふこと莫かれ 戸を墮りて雷に驚

かずと

〔原文は概ね岩波古典文学大系本に拠るも五句目の「応」は、前掲の隋氏の考察文にある指摘に従い、「夜」を「応」に改めた。〕（三十二頁） 訓は筆者試読。〕

この詩は既に拙稿^⑤で、『白氏文集』「1033歳暮」との比較を通して論じたが、その中で本稿に関わると思われる箇所を次に再掲する。

この詩の詠作事情は、仁和五年讃岐守として赴任中のもので、時に四十五歳である。また道真に関わるものとして、その一年前六月橘広相の阿衡問題が紛糾し、これについて基経を諫めるため十月ころしばらく上京したようである。（中略）道真のこ

の詩の詠作された時の心情としては、「中央政界」から隔絶された「無用者」としての自己認識が強かったと考えられる。第六句で道真の目が内へ向けられた時、「蔭」のイメージとして自分を強調せざるを得なかったのではなからうか。

この第七句の発想は白詩によるのであって、この句の真意は次の八句と呼応させて考えるべきである。(中略)第七句の「運・不運は自分の関知するところではない」の両詩の類似発想は、白詩においては、「だから、くよくよ考えても何の解決策もでてこない。ならば酒でも飲んで気を晴らす以外に何があるう」と結ぶのである。しかし道真はそのように詩内容を展開させていない。「だから、不遇に甘んじている自分も、また幸に転じることもあるのではないか、いやきつとあるはずだ。今の不遇な状況も自分の関知しないところで訪れた。ならば、好機もいつかは時勢の移り変わりにより訪れるはずだ」と強く自分自身に納得させようとしたのではあるまいか。その心情の表出として「莫言」の語をとらえてみたい。この語は何かを否定しようとする道真の偽らざる叫びの声の露呈と考えられる。(中略)八句目の「戸を墮り寒気に備えている虫」の存在は、実は道真自身のことではないのだろうか。言い換えると、讃岐守として京より隔絶された状況に置かれている道真の心情は「冬の虫」のそれと思われる。だからこそ、「莫言」と否定せざるを得なかったはずである。曆の上では今日から春なのだ。外界はこれ以降一歩一歩春の気配を強めていくに違いない。自分

の状況だってしかりだ。と信じようとする心情の現れとしてこの第八句を見れば、前の句の意味するものも明らかになってくるものと考えられる。

この道真の心情は裏を返せば、京へ戻る日をひたすら待ちわび希求する切実な願いであり讃岐生活を余儀なくされている現状への苛ちとも思われる。(三十六・三十七頁)

一方、この詩について最近、注目すべき解釈を公にされている前掲の隋氏は句毎の詳細な考察ののち、「道真が讃岐時代の自身の生活状況を「閑客」の時期、「失道」の時期と位置づけていることは自作の中に述べたとおりである。「失道」は「詩臣」の勤めが果たせなかったことを指す言葉であり、「閑客」も自分の理想的な生き方ではない状態を意味する言葉である。その悶々たる日々の中で、彼を終始支えてきたのは、任期を終えた後、再び詩臣として中央に出仕できるといふ希望である。その苦悶と希望が混じった複雑な心境が、「立春」詩において、巧に詠出されたのである。」(三十五頁)と結論付けられている。

ここで、「492元年立春 十二月十九日」の作品に戻る。隋氏が、既に載せた「278立春 在十二月廿六日」との比較の視点で、詳細な論を展開されている。傾聴すべき示唆に富む考察文である。¹ここでは、その論に拠りつつ若干の私論を付加して、以下に記す。

この二詩ともに年内に到来した「立春」に触発されて詠まれた作品であること。そして「278立春 在十二月廿六日」の詩が、讃岐国守時代に「492元年立春 十二月十九日」は大宰府謫居時代に詠まれたという、いずれも、自分の意志とは別の所（外庄）で京を離れた異郷の地で詠作された作品であるという共通点がある。

ところが、道真の身の上に目を移すと決定的な相違がある。年齢に十四年のブランクがあることもさることながら、道真自身

の置かれている状況が全く異なる。前者は、讃岐国守任期満了一年前の作であり京へ戻れるのが確実であるのに対し、後者は、罪を被り、左遷されて、京に戻れる望みも絶たれる。つまり、「延喜」という開元が行なわれ、大赦が行なわれながら、道真には、それが全く及ばず、「逆賊」のレッテルまで貼られてしまうという事態をつきつけられているのである。その事情については拙著でこの詩の詠まれた数か月前に同じく道真より詠作された「讀開元詔書」の注釈を通して詳しく論じた。⁶その絶望の中で詠まれた作品であることを改めて想起すべきだと思ふ。

それが、五句目の「根拔樹（根抜けたる樹）」であり、六句目の「骨傷魚（骨傷むる魚）」なのである。この道真が、七・八句「偏憑延喜開元曆 東北廻頭拜斗杓（偏に延喜元曆を開くを憑み 東北に頭を廻らして斗杓を拜せしを）」の二句を従来解釈されてきたような、「それでもなお、醍醐天皇に忠義を貫

き、天皇の大赦により京に戻れる期待を暗示している」と詠むことに、いささか違和感を抱く。この作品が大宰府着任時の初期の頃であるならば十分の肯首できる心情であるが、この『菅家後集』が、一部を除いて原則、時系列に配置されていることを考えればこの作品は決してそのような時期のものではない。

そこで次に「㊦『菅家後集』「492元年立春 十二月十九日」前後の漢詩群を通して見えてくるもの」に論を進める。

この作品の置かれている前の詩に目を移すと「489白微霰（七言律詩）「490雪夜思家竹」（十二韻）「聴寺鐘 二月（十二月の誤字か）十七日」（七言絶句）があり、後には、「493南館夜聞都府礼仏懺悔」（七言絶句）「494歳日感懷」（五言律詩）「495梅花」（七言絶句）と続く。筆者は既に「489白微霰」以外は全詩注釈を施した拙論を公表してきた。ここでは重複を避け、それぞれの詩に込められている道真自身の心情に視点を絞り考察をしてみる。

「489白微霰」では、「霰」を第七・八句で「袖中收拾して慙慙に見れば／応に是れ、氷と為れる涙の未だ乾かざるなるべし」と詠む。「490雪夜思家竹」では、既に後藤昭雄氏が指摘されている⁷十三・十四句で京にある竹を思つて「直を抱けど自ら低迷し／貞を含めど空しく破裂せり」と自己投影を暗示する句作りをし、二十一・二十二句で「千万言へども効無からん／亦漣湍し嗚咽す」と詠む。「491聴寺鐘」では三・四句で「大いに奇しふ 春夏秋冬盡きても／我が為には終に抜苦の聲無きを」と

詠む。「93南館夜聞都府礼仏懺悔」の二句で「我は泣く 天涯放逐の辜」四句目では「発心北に向かひ只南無のみ」と詠む。

「494歳日感懐」では七・八句で「合掌して観音を念じ／屠蘇あれども盃を把らず」と詠み「495梅花」では三・四句で、「人は是れ同じ人 梅は異なる樹／知りぬ 花のみ笑みて我には悲しみの多きを」と詠む作品が配列されている。いずれの句も自然の事象や自然物に触発されて自分の心情を吐露している作品群である。しかしながら、己の今の置かれている状況からくる悲しみを直情するものから、これを仏教への救いに変移させる心情への変化は見られるものの、何かにすがって望京の念を吐露する心情は読み取れない。むしろいかんともしがたい現実を前に、それを受け入れるしかない。それを諦念に置き換えられるものならそうしたい切ない心情にさいなまれている時の作品がこの「492元年立春」ではないだろうか。

その視点で、この作品に対峙すれば、七・八句の解釈を従来ものから再考する必要があると思う。

四

筆者は、その鍵となる語が七句目にある「偏」の解釈だと考える。この「偏」について詳細に考察されたものが、前述の隋源遠氏の論文である。¹⁾隋氏の論に拠りつつも七、八句の解釈については私論を以下、展開してみる。

「偏」は語釈の頁でも触れたが、『漢語大詞典』の説明にある「副詞。表示事実與希望相反亦表示違反客觀要求。偏偏・偏要」の用法に該当するものと考えたい。

隋氏は、その所を前掲の「278立春 十二月十九日」を挙げ次のように説明する。

「曆と現実のギャップを描いた首聯だが、実は詩人自身の理想と現実との間の落差を意識したものである。注目したいのは副詞「偏」の使用である。副詞「偏」を「ひとへに」と訓読するのが一般的であるが、和語の「ひとへに」は漢語の副詞「偏」の同義語ではない。副詞「偏」に「ことさら」や「あやにくに、人の気も知らないで」などの意味も含まれているという点については、既に小川環樹氏による指摘がある。『広韻』によると、偏の字義は「不正也。鄙也。衰也」である。「衰」は正当ではない、邪悪を意味する言葉で、「不正」と「鄙」と同じく負のイメージを含む言葉である。その字義を根源とした「偏」は、副詞として使用される際に、公正ではない、期待外れなどといった負のニュアンスを持つ場合が多い²⁾(二十七―二十八頁)として具体的に『白氏文集』『698客中守義』の中の「畏老偏驚節」の用例及び『菅家文章』『38停習弹琴』の「偏信琴書者資」の用例を挙げつつさらに、次のように言及する。

「詩文の中に使われる副詞「偏」を解釈する際は、和訓の「ひとへに」の語義に囚われず、その中にある負のニュアンスを注

意深く読み取る必要がある。では、「立春」詩における「偏」はどういう「不正」を現しているのだろうか。結論から言うと、この「偏」は「事実と希望相反（事実と希望とが相反する）」という負のニュアンスを含んだ表現と考えられる。（中略）恐らく彼の本当の願いは、都にいて、天子の側で、臣下達と共にこの春の到来を祝い、詩臣としての勤めを果たすことであろう。その希望が叶わず、曆のみを頼りに春の到来を認識せざるを得ないという事象に直面した時の落胆を表すために、「偏」が用いられたのである。」（二十八～二十九頁）

この隋氏の指摘する「偏」の語の副詞的用法を、道真の作品で検索すると、次の三作品がそれにあたると思われる。この一つは、隋氏も指摘されているものだが、「38 停習弹琴」の一句目にある「偏信琴書學者資（偏へに信ず 琴書は學者の資なる）」の用例である。

この句は詩題にあるように「琴を弾くことを習ふことを停む」つまり琴のレッスンを止め、菅家伝来の学問にだけ精を出すことを決意した作品の一句目にある。「偏信琴書學者資（偏に信ず 琴と書は學者の資なるを）」の句意は、「琴をたしなみ、書に親しむのは学者としての大切な素養とがたくな」（一途に）信じてきたが」という「偏」を「ひとえに」と訓じ、「一途に」「ひたすら」の意で解することも不可能ではないが、こゝは、漢語大詞典にいう「表示事実與希望相反」の意で取るべ

きところだと思ふ。つまり、「琴や書をたしなむことが学者たるものの素養と思い励むこと」が、この自分自身の強い「願望」であつて、「現実」は「琴に関しては素質のないことを自覚し、断念することを決意した」ことからくる自分への「失望」「無念さ」がこの語に込められているのではないか。したがって、「琴と書をたしなむのが学者たるものの素質とことさら信じ、励んできたが（現実はそのとはならなかつた）」の一句の意と解釈したい。

▼二つ目の用例として「408 扇」の六句目にある句中の「偏」を挙げてみたい。

この作品は、道真が東宮敦仁親王のもとに宿直した時、親王の為に速詠した詠物詩の中の一首である。「扇」と題して五・六句に「逆愁秋早至／偏待熱先隆（逆に愁ふ秋の早く至るを／偏に待つ熱の先づ降りなるを）」とある。これは夏の風物である「扇」を詠む。その背景は、「秋になると無用のものとして捨てられるもの」という認識がある。五句目で「暑い夏から秋の涼さを求める世の常の思いとは」逆に、秋の早く来て、我が身が捨てられることを恐れている」と詠み、六句目は「（現実ではありえないことだが）まだ猛暑が盛り返してくることを心待ちする」の意となる。ここに、「希望」が「夏がずっと続くこと」で現実には「涼風の吹く秋が必ず訪れる」という。そのギャップの中で、「待つ」行為に「偏に」が、「失望」「無

念」の意のこもった副詞として作用している。

▼そして三つ目の用例として本稿の七・八句目「偏憑延喜開元曆／東北廻頭拜斗杓（偏に）延喜 元曆を 開くを憑み／東北に 頭を廻らして斗杓を拝せしを）」を挙げる事が出来る。この「偏」は下の「憑」に掛かる副詞的用法とすると「ことさら、あてにできたが…」と続く句となる。それは、直接的には七句目の「延喜と改元されて新しい時代の到来した事を」に掛かるが、内容的にはそれが八句目の「東北に頭を向けて京都の空を想い、同じ夜空に宿す、この北斗七星に心をこめて祈ったことを」を受けての「憑む」であることは自明である。ここでの道真にとつての「願望・希望」とは「延喜という改元を受けて大赦が自分にも及び、京に戻ることを許されること」であり、その「現実」は、「479讀開元詔書」で詠じられている、「恩赦」どころか「逆賊」のレッテルまで貼られている厳しい許し難い事態であるその落差に「失望」し「無念さ」をかみしめる思いが、「偏憑」（偏に憑む）にこめられていると考えられないだろうか。

つまり、延喜の改元を受けてさまざまな思いを折ってきた。その願いが、今全て絶たれてしまったその現実を目の当たりにした無念の心情がこの句に流れているのではないか。こう考えると五・六句中にある「根抜けたる樹」「骨傷むる魚」の暗喩を使って今の自分の事態を見つめる道真のそれと見事につながるように思う。本稿ではそうした視点に立った七、八句に「延

喜」と改名されて 新しい時代の到来したことに 私は全てを託し、東北に頭を向けて はるか京都の空を想い、同じ夜空に宿す、この北斗七星に心をこめて祈ったことが、いったい何になろう。（現実には、私の望みがすべて断たれているというのに）という解釈を「偏」の語義の考察を通して新たに提示してみた。

【注】

- (1) 拙稿「菅家後集」所載「哭奥州藤使君」の構成論考」
〔国語国文学研究〕第四十九号 熊本大学国語国文学会
- (2) 拙稿「菅原道真研究―菅家後集―全注釈（一）―」
〔国語国文学研究〕第三十六号 熊本大学国語国文学会
- (3) 柳澤良二「菅家後集」注解稿（二十八）
〔北陸古典研究会〕第二十六号
- (4) 隋源速「菅原道真の年内立春詠」
〔和漢比較文学〕第五十号
- (5) 拙稿「道真の詩に投影された『白氏文集』
―道真の『白氏文集』からの摂取態度の一考察（その二）―」
〔九州大谷国文〕第一五号
- (6) 道真梅の会編「哭奥州藤使君」他一編（菅家後集）全注釈（二）
（焼山廣志監修 荒川美枝子・井原和也・須藤修一・
田中陽子共著）
- (7) 後藤昭雄「菅原道真の詠竹詩」（平安朝文人詩）吉川弘文館

（やきやま ひろし／
大学院文学研究科第七回修了／有明高専）